



Title	《自己検閲》に伴う「移動する子ども」の情動：米日間往還を経験した女性のライフストーリーを事例に
Author(s)	小幡，佳菜絵
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2025, 21, p. 55-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102059
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究ノート》

《自己検閲》に伴う「移動する子ども」の情動

— 米日間往還を経験した女性のライフストーリーを事例に —

小幡 佳菜絵（清華大学大学院 博士後期課程）

xfjch19@mails.tsinghua.edu.cn

Emotion of a Child Crossing Borders Triggered by “Self-censorship”:

A Life-story of a Woman with Transnational Experience across U.S. and Japan

Kanae OBATA

要 旨

本稿は、米日間の往還とともに成長した女性の、「移動する子ども」の経験と記憶を描くライフストーリーを手がかりに、当事者の言語的適応・言語学習の内実を、情動の観点から探索的に検討する萌芽的研究である。半構造化インタビューの結果、《ジェットコースターの日常と身体的反応》《自己検閲》《想像の自己》が、情動をめぐる3カテゴリーとして抽出された。この結果は、その土地に留まっていれば十全的な成員となっていたかもしれない《想像の自己》を仮想することで、自身の言語産出に対する再帰的眼差しである《自己検閲》が強く促された結果、《ジェットコースターの日常と身体的反応》という情動的経験と記憶が喚起される可能性を示唆する。川上（2023）によって理論的に提起された、「移動する子ども」における情動の果たす役割・ありようを研究課題として予め明示的に設定し、事例とともに考察した点に、本稿の萌芽的研究としての意義が期待できる。

Abstract

The present study investigates the process of linguistic adaptation and language learning in a case study of a female participant who has transnationally grown up in the U.S. and Japan. The research draws on a semi-structured interview concerning the participant's life story to explore her experiences and memories as a “child crossing borders,” with a particular focus on emotion. The findings identify three primary categories that elucidate her emotionally engaged transnational experiences since childhood: “everyday life as a rollercoaster and its associated physical reactions,” “self-censorship,” and “imagined self.” It is suggested that emotional experiences and memories are evoked in a form of “everyday life as a rollercoaster and associated physical reactions” as a result of acts of “self-censorship.” This act of self-censorship serves as a strategic regulatory mechanism over one's own linguistic production, prompted by the virtual nature of the “imagined self.” In the context of the virtual self, the participant imagines that had she remained in the locality, she might have become a fully integrated member of the community. The significance of this paper as exploratory research lies in its explicit examination of the role and nature of emotions in “child crossing borders,” a concept theorized by Kawakami (2023).

キーワード：「移動する子ども」、情動、往還、ライフストーリー、Pierre Bourdieu

1. 「移動する子ども」における「情動」と「自己検閲」という観点

本稿は、幼少期から米日間の空間的往還とともに成長した、ひとりの女性の「移動する子ども」(川上, 2021) という経験と記憶を描くライフストーリーを手がかりに、当事者の言語的適応・言語学習の経験と記憶の内実を、「情動 (emotion)」(川上, 2023; ダマシオ, 2003, 2005, 2010) という観点を起点に、探索的に検討することを目的とした萌芽的研究である。「移動する子ども」とは、実際に移動の経験をもつ実体としての子どもを指すわけではなく、「幼少期より複数言語環境で成長したという経験と記憶を中心に持つ分析概念」(川上, 2021, p.5) のことを指す。本稿では、このように複数言語環境で成長した当事者(仮名:Cさん)の経験と記憶のうち、とりわけ情動という側面に焦点をあてることで、空間的往還に伴う言語的適応・言語学習における当事者の主観的意味世界の内実により精緻に迫ることを目指す。

具体的には、Cさんの語りを事例として、当事者の言語的適応・言語学習の過程において、どのような情動が身体的変化とともに喚起されたと考えられるのか、また、このような情動はなぜ生じたかと解釈しうるのかを、Bourdieu (1991) の提起する「自己検閲 (self-censorship)」という概念を参照しつつ、社会言語学の視角から、その背景動因を考察することを本稿では試みる。情動の視点は、川上 (2023) により、今後の「移動する子ども」学の展開における、「不可欠な視点」としてその重要性が指摘されている (p.66)。また、自己検閲という概念については、他者の眼差しのもと、「緊張」(ブルデュー, 1993, p.89) などの情動的経験を伴いつつ、言語的適応の具体的場面・発話に話者が従事する傾向性との関連のなかで、Bourdieu によって議論されている。このことから、自己検閲という概念が、情動の喚起される背景動因を社会言語学的に紐解く手立てとなりうることを、本稿では仮定した。

ここで、本論に入る前に、本主題を構成する2点の鍵概念について、予めその意味・見通しを提示しておきたい。まず、「情動 (emotion)」とは、神経学者のダマシオ (2003, 2005, 2010) の議論によると、「身体が硬直する」「心臓がドキドキする」などの特有の身体的反応として表出した、「生命調節のプロセス」のことを指し、「感情 (feeling)」とは区別される概念である。換言すれば、素朴な日常用語としては、概して同義的に・相互互換的に使用される「情動」と「感情」という両語ではあるものの、ダマシオの主張の文脈では、「情動」は身体次元において、一方、「感情」は心的次元において、それぞれ表出される(「演じられる」)生命調節のプロセスとして、概念的に区別されている。しかしながら、本稿における事例の実際の検討に際しては、「情動」と「感情」の区別が、しばしば明示的にはなされにくいという困難が伴うことを、予め断っておきたい。その理由は、実際の有機体にあつては、両者は因果的な繋がりをもつことが想定されること(例:未知の物体を見て、心臓がドキドキするなどの身体的反応が先行して生じるがゆえに、怖さという感情が生じる)や、本稿では、実証的な脳科学・神経科学によるアプローチを採用するのではなく、当事者のライフストーリーを手がかりに、解釈とともに質的に考察を進めるという方法論的理由に主に拠る。

また、本節で見通しを予示したいもうひとつの鍵概念は、「自己検閲 (self-censorship)」(Bourdieu, 1991) である。この概念は、経済学のメタファーにもとづき、具体的な個々の発話を「言語的産物

(linguistic products)」と見立て、これらが言語規範という価値基準に照らして産出・交換される社会的構造を「言語市場 (linguistic market)」として解釈した、Bourdieu (1991) の言語実践モデルを構成する概念のひとつである。Bourdieu (1991) によると、ある言語市場に属する話者は、多くの場合、国家権力の規定する公用語や標準語という「正統言語 (legitimate language)」を、必ずしも当人の明示的意識を伴わないまま肯定的に価値づけたり、社会的承認と無条件に結びつけたりすることで、これらの言語および運用能力を「言語資本 (linguistic capital)」と認める方向に傾く。「自己検閲」とは、これら正統言語を中心に共同体内に共在する言語を階層化する、言語規範・言語イデオロギーや言語的価値基準を、話者自身が内面化したうえで自己参照しつつ、さらに、それらに見合った言語形式を産出することで、他者に自らの発話＝言語的産物を受容してもらえよう、再帰的に自己点検・自己調節する営為や構え (disposition) のことを、総じて意味する。

本稿では、「情動」(川上, 2023; ダマシオ, 2003, 2005, 2010) と「自己検閲」(Bourdieu, 1991) というこれら両観点を中心に、「移動する子ども」の言語的適応・言語学習という経験と記憶の内実について、米国で生まれ育ち (0-6 歳)、日本で初等・前期中等教育を経験したのちに (6-16 歳)、後期中等教育の段階で再び米国へと移動した (16-30 歳)、ひとりの女性のライフストーリーを事例に考察を進めていく。このように、往還に特徴づけられた「移動する子ども」の経験と記憶をかたちづくる、言語的適応・言語学習に際する情動的側面を明らかにすることは、当事者の主観的意味世界の内実をさらに精緻に紐解くうえで示唆をもたらすだけではない。この点に加え、当事者が経験する、言語的適応・言語学習に伴う「生／ライフ (生命・生活・生涯)」(小倉, 2013a, p.172) を、往還という文脈のなかで多層的に想像・理解する機会を、事例とともに、言語教育実践者や保護者に拓くという意味で、広く母語・継承語・バイリンガル教育の実践に資する可能性を本稿は期待する。

2. 先行研究と研究課題 (RQ)

2.1 「移動する子ども」学における「情動」という研究課題

これまで、「移動する子ども」学では、国民国家や、それにしばしば紐づく個別言語の分類・類型をめぐる、既存の社会・政治的カテゴリーやラベルの境界を超えた移動を、日常的に重ねるという意味で、幼少期からトランスナショナルな生活世界・主観的意味世界を生きる人たちの経験と記憶に関する研究が、「移動」と「ことば」という両観点を基軸に進められてきた。川上 (2021) によれば、このように、移動性・複文化性・複言語性によって特徴づけられる「移動する子ども」の経験と記憶は、「空間」「言語間」「言語教育カテゴリー間」という3種類の移動形態がしばしば相互浸透的に影響しあいながら、動的に形成・構築されていく (pp.5-6)。また、時間軸の観点からみたとき、「移動する子ども」という経験と記憶は、「今、ここ」という共時性に力点のある日常的移動と、「あの時そしてこれから」という通時的眼差しから理解される個人史的移動の2軸によって、動的に紡がれるものであると理解される (川上, 2021, pp.5-6)。

このように、これまで、「移動する子ども」学は、幼少期から複数言語環境に生きる人たちの主観的意味世界をより深く理解するための、概念・分析枠組みを提示してきたといえる。その一方で、川上 (2023) は、「移動する子ども」学における、今後の萌芽的研究課題・指針として、神経学者のダマシオ (2003, 2005, 2010) の議論を参照しつつ、「情動 (emotion)」の観点から、「移動する子ども」

の主観的意味世界をさらに分析・検討する必要性を指摘している。ここで主題とされる「情動(emotion)」とは、環境への適応に際して、視覚経験や触覚経験などの身体的変化が記号化されることによって生じる、「脳にモニターされマッピングされた身体的反応」のことを指し、心的パターンである「感情(feeling)」とは、区別されるものであるという(川上, 2023, p.71)。このように身体に紐づく「情動」が、移動に際して異なる環境への適応に迫られる、「移動する子ども」の経験と記憶の動的形成過程において、中心的役割を担うという可能性を指摘した点に、川上(2023)の独自性・新規性があると本稿は理解する。

2.2 往還に根ざす「移動する子ども」に関する先行研究

幼少期から複数の生活拠点を行き来する(往還する)当事者における、複数言語とのかかわりや異文化との接触経験・適応経験については、多様な学問領域において、既に一定の研究蓄積をみる(川上, 2013, 2021; 小林, 2021; ハヤシザキ・山ノ内・山本, 2013 など)。例えば、本稿で対象とする日本・米国間の往還に伴う当事者の経験と記憶については、小林(2021)のエスノグラフィー研究が特筆に値するだろう。ここでは、米国カリフォルニアの現地校であるパール高校(仮名)をフィールドに、「日本人」生徒の日常の相互行為に焦点があてられ、「日本人」というカテゴリーをめぐる、高校生たちによるアイデンティティの位置取りの動的様相が丁寧に描出されている。

なかでも、本稿の主題ととりわけ関連性が強いのは、研究参加者の在米「日本人」高校生たちが、多くは大学進学を契機として日本に再帰国するなかで、「帰国子女」に戦略的に「なる」過程を描いた、第6章の議論だろう(小林, 2021, pp.153-168)。この過程において、当該高校生たちは、周囲の他者が自分自身をどのように眼差し、また、どのような評価を与えるかを敏感に感じとるなかで、帰国生入試などの教育制度をも参照しつつ、日本にいる「日本人」と、「帰国生」である自分自身との差異化を戦略的に試みる。このように、小林(2021)は、日常の相互行為という視角から、複数言語環境・往還という生活世界に特徴づけられる高校生たちによるアイデンティティの位置取りの様相を、他者からの名付けと自らの名乗りの連鎖的・「弁証法的営為」(小幡・小澤, 2024; 川上, 2021, pp.69-88)として主題化することで、日米間を往還する当事者たちの日常のリアリティに関する、豊かな一次資料を提示している。その一方で、学校空間を中心とした、相互行為という行為遂行的次元に観察・分析の力点が置かれているがゆえに、当事者の情動的側面に関しては、この点に直接的に紐づく研究課題を予め設定することなく、明示的な考察にまで十分至っていないことに課題が残るように思われる。

一方、ハヤシザキ・山ノ内・山本(2013)は、日本とブラジルの間を幼少期から往還する「トランスマイグラント(transmigrant)」(Bash et al., 1994)としての、日系ブラジル人の子どもたちを主題に、往還に特徴づけられる「移動する子ども」の経験と記憶や、当事者の生のありようを、主に教育戦略の視角から分析・検討している。ここでは、幼少期にブラジル社会から日本社会へ移動したのち、再びブラジル社会へと帰還する当事者たちの、ブラジル社会への(再)適応のありようを、かれらの一人称的視点から探索している。総じて、「適応／不適応」という一人称的評価に焦点をあてたうえで、往還という移動形態が必ずしも適応の障壁になるわけではない、という示唆を提示した点に、ハヤシザキ・山ノ内・山本(2013)の考察の独自性があるといえるだろう。つまり、当事者の視点からみたとき、往還という「移動する子ども」の経験と記憶は、かれらの適応の過程において、肯定的とも非肯定的ともいえる両義的意味をもちうる、という視座を当該研究から学びとることができる。

他方で、適応／不適応に際する当事者の情動の様相は、当該研究においても、小林（2021）と同様、明示的な分析視点として予め設定されていないことから、具体的な議論が不十分であるように思われる。

また、川上（2021, pp.205-230）では、ドイツと日本にそれぞれルーツをもつ両親のもとに生まれ、双方の国を中心に幼少期から往還を経験した、40代女性（仮名：マユミさん）の「自伝的記憶」（佐藤・越智・下島，2008）が主題化されている。この「自伝的記憶」には、過去の出来事に重点を置く、エピソード記憶（出来事に関する記憶）や意味記憶（出来事の意味に関する記憶）に加え、展望的記憶（未来へ向けた予定・行動に関する記憶）も同時に包摂されているという（川上，2021, p.207）。総じて、「移動する子ども」という経験と記憶のうち、言語的適応・言語学習に伴う情動的側面を検討する本稿の議論において、とりわけ大きな示唆を与えるのは、このような自伝的記憶には、肯定的な「快記憶」と、辛さに特徴づけられる「不快記憶」が同時に含まれるという指摘である（川上，2021, p.228）。

例えば、マユミさんの場合、「快記憶」には東京の大学に進学した際の教授との交流が含まれ、一方、「不快記憶」としては、「日本語運用能力が十分でない」という自己認識のもと、10歳のときに日本へ移動せざるをえなかった出来事が挙げられている。このように、移動性・複文化性・複言語性に特徴づけられる「移動する子ども」の経験と記憶においては、複数言語環境だからこそ生じる、言語によって「他者と繋がり、ときには他者と繋がらない体験」（川上，2021, p.3）が、より頻繁に、また、より強力に、自伝的記憶の感情的側面に作用しうる。総じて、マユミさんのライフストーリーからは、往還の経験や言語的適応に際する、「快記憶」「不快記憶」という自伝的記憶に伴う感情の両義性を、学びとることができよう。他方で、ここで描出されている心的パターン（感情）に加え、それらにしばしば先行して生じる、身体的反応（情動）をも射程として組み入れることが、往還に根ざした「移動する子ども」の経験と記憶とともに生きる当事者の、生活世界・主観的意味世界をより丁寧に理解するうえで求められるように思われる。これらの先行研究からの示唆をふまえ、本稿の研究課題（RQ）を、次節で具体的に議論したい。

2.3 研究課題（RQ）

これまでのところ、主要先行研究から、次の3点の示唆が主に得られた。第一に、小林（2021）では、「移動する子ども」の経験と記憶のなかでも、とりわけ成長期の生活の大部分を過ごすであろう、学校空間における日常の相互行為をとおして、他者からの名付けや眼差し・評価を内面化することが、複数の生活拠点を往還する当事者の情動的側面に大きな影響を与える可能性が示唆されている。第二に、ハヤシザキ・山ノ内・山本（2013）では、往還という移動形態に伴う「移動する子ども」の経験と記憶は、当事者の（再）適応過程において、少なくとも一人称的視座からは、必ずしも障壁になるとは限らないという点が指摘されている。このことから、往還の経験と記憶を構成する情動的側面についての、当事者の意味づけも、肯定的とも否定的ともいえない、両義性を帯びる可能性が推測される。最後に、川上（2021, pp.205-230）では、「移動する子ども」の自伝的記憶が、「快記憶」「不快記憶」というかたちで、感情面において両義的に構成されうることが指摘されている。川上（2021）のこの指摘は、ハヤシザキ・山ノ内・山本（2013）から得られた、上述の解釈と同様、情動という身体に紐づく「移動する子ども」の経験と記憶をめぐる、肯定的意味づけ・非肯定的意味づけの両側面を包括的に検討する必要性を、筆者に気づかせる。

主要先行研究から得られた、以上の示唆をふまえ、本稿では次の2点の研究課題(RQ)を設定した。第一に、往還を経た(再)適応の過程において、とりわけ、学校空間における言語的適応や言語学習の文脈のなかで、往還という移動形態とともに幼少期から複数言語環境で生きる当事者は、どのような情動的経験と記憶を構成するのか(RQ1)。第二に、このような当事者の情動が喚起される動因は、社会言語学の視角からみたとき、どのように解釈・考察することが可能なのか。また、ここで喚起される情動は、(再)適応に関する意味づけや自伝的記憶における、肯定的とも非肯定的とも捉えられる両義性に、どのように関係するのか(RQ2)。次節では、これら2点のRQに回答するための研究方法を提示する。

3. 研究方法と研究参加者

3.1 研究方法

本研究では、日本にルーツをもつ両親のもと米国で生まれ、幼少期から米国と日本の往還を経験するなかで成長したCさん(仮名)を研究参加者とした、ライフストーリー研究法を採用した。ライフストーリーとは、「個人の生(life)についての口述の物語」(小倉, 2013b, p.96)を総じて意味し、ライフストーリー研究法は、研究参加者当事者の語りにもとづき、「個人の生の全体性」(ibid., p.96)に接近する志向性をもつ質的研究法である。ここで、「生の全体性」への志向性とは、特定の抽象的な役割(例:母親)やカテゴリー(例:日本人)に還元して個人を理解しようとする態度に替えて、当事者による生全体の主体的意味づけに積極的意義を見出し、かれらによって文脈とともに語られる物語を起点に、個人の具体的「生/ライフ」の理解を目指す問題意識のことを指す。また、「生/ライフ」とは、身体的経験を意味する「生命」、日常の活動経験を示す「生活」、人生という時間経験としての「生涯」を縫合する研究視点・多義的概念のことを指す(小倉, 2013a, p.172)。本稿では、往還とともにある「生涯」の記憶と経験における、情動という「生命」に紐づく身体的経験を起点に、当事者の「生活」世界・主観的意味世界に焦点をあてていることから、ライフストーリー研究法を採用することが、方法論として適切であると考えた。

データ収集に際しては、Cさんとの半構造化インタビューを、2024年9月3日に約60分間にわたり、日本語で実施した。3.2節で詳述するように、Cさんは米日間の往還を経て30歳まで米国で過ごしたのち、2022年以降、生活拠点を中国北京に移している。筆者とは中国北京で、共通の知人を介して2022年後半に出会い、当該インタビュー実施日までに、計7回の対面でのインフォーマルな対話やオンラインでの交流(例:テキスト・メッセージでの交流)を重ね、十分なラポール形成の過程を経た。当日のインタビュー内容は、研究参加者本人の承諾を事前に得たうえで、録音をおこなった。

この録音データを対象とした分析に際しては、Open Coding(日高, 2019; Corbin & Strauss, 2015)を採用した。Open Codingとは、インタビューの逐語録などを含む具体的なテキストを、「抽象的な概念のかたち置き換えていく作業のこと」(日高, 2019, p.72)を広く意味する。この分析過程においては、概して次の2通りの方法がある。第一に、「あらかじめ設定した概念に、具体的なテキストを当てはめる」演繹的方法、第二に、「具体的なテキストに基づいて、類似していると考えられるものを集め、概念を作っていく」帰納的方法である(ibid., p.73)。本稿では、この両方法を援用し、コーディングを実施した。具体的には、録音データを書き起こした、約1.3万字にわたる日本語テキスト

を切片化したうえで、ラベル付与およびラベル統合をおこない、最終的に、RQ への回答に耐えうる 3 カテゴリーを抽出した。これらの研究結果および考察は、4 節で提示する。

3.2 研究参加者

本研究の参加者である C さんは、日本国籍・日本語母語話者の両親のもと、米国東海岸の都市で生まれ、6 歳までそこで育った。その後、父親の仕事の都合で、小学校入学前に日本に移住し、16 歳まで過ごす。さらにその後、C さんが高校生のときに、同様に父親の仕事の理由に一家で再渡米し、以前（0-6 歳のとき）と同じ米国東海岸の都市を主たる生活拠点として、30 歳まで過ごした経緯をもつ。この 2 度目の米国居住期間に、中国にルーツをもつ配偶者と結婚し、2022 年に中国北京へ移住している。

家庭内の言語環境に関しては、C さんと両親・弟妹の五人家族の間では、日本語が基本的に使用され、一方、配偶者との間では、家庭内の共通言語レパートリーとして英語が主に選択されているという。このような背景もあり、C さんの現在の自己評価によると、日本語と（米国）英語が自身の「強い」言語レパートリーとして認められ、一方、中国語は「弱い」レパートリーであるという。本稿では、このように、英語が自身の「強い」レパートリーとして位置づけられるに至るまでの、C さんのライフストーリーに焦点をあてる。なかでも、幼少期からの米日間往還に特徴づけられる、C さんの移動の軌跡において、英語とのかかわりに大きな影響を与えた、16 歳以降の米国への（再）適応の過程を、情動的側面を主題としつつ、次節で中心的に検討していく。

4. 研究結果と考察

本節では、C さんのライフストーリーの Open Coding による分析から得られた、RQ への回答となる 3 カテゴリーに則して、研究結果および考察を提示する。ここでは、C さんのライフストーリーのなかで再構成された、主に学校空間における、言語的適応・言語学習に際して喚起された情動的経験・記憶を具体的に記述するとともに（RQ1）、なぜ、これらの情動が生じたのか、主に社会言語学の視角から解釈・考察することを試みる（RQ2）。具体的には、分析の結果、《ジェットコースターの日常と身体的反応》、《自己検閲（self-censorship）》、《想像の自己》という 3 カテゴリーが抽出された。以下の節では、これらのカテゴリーの内実と、その解釈・考察を中心に、詳細に検討していく。なお、発話データには、実際のインタビューでは省略された部分を、筆者が補っている。その該当箇所は、括弧で示している。また、各カテゴリーの性格を強く反映していると思われる発話データの部分を、筆者の判断で下線によって示している。

4.1 情動の内実：《ジェットコースターの日常と身体的反応》

C さんによると、16 歳での再渡米直後の 1 年半の期間が、生まれてから 30 歳までの米日往還の経験と記憶のなかで、最も辛かった時期だったという。なかでも、最大の「不快記憶」として C さんの脳裏に刻まれているのが、米国の環境へ適応する際に起きた、身体的反応だったという。

発話データ 1

一番苦しかったのは、(米国は) 環境から違うから、(例えば) シャワー浴びるときも、軟水から硬水になって。身体ストレスもあったかもしれないけど、適応しようとしていて、私、アトピー出たんだよね。(米国へ再移住をした) 最初の頃。シャワー浴びるだけでも、髪がギシギシしてるし。顔もすごい真っ赤に、蕁麻疹みたいになっちゃって。ストレスで掻いちゃうから。アトピーのところとか。身体のリアクションがすごくて。たぶん、心理的な要因のストレスが身体にも出てきて。

発話番号 01, 2024-09-03-15'22-16'12

川上(2023)によると、人は概して、異なる環境や状況への適応に際して、移動後も適切にかつ安定的に行動するため、場所の変化に伴う情報等を収集・統合するなかで、「移動知 (mobiligence)」を形成し、環境との調和的關係を自律的に作りだそうとするという (p.70)。また、このような移動知は、身体・脳・環境の相互作用によって、動的に形成されるとも指摘されている。発話データ 1 で描出される、C さんが経験した「身体のリアクション」は、米国への(再)適応に際して、このような身体・脳・環境の相互作用に根ざす移動知が形成されつつあった、証左のひとつといえるかもしれない。さらに、C さんは、学校空間での適応経験について、次のように続ける。

発話データ 2

[...] (米国の高校は) 現地校だったから、全部英語で。ビックリすることが多くて。「あ! 移動教室なんだ!」とか。クラスにずっと、日本みたいに同じクラスにいるわけじゃない。移動しなきゃいけない。教室の場所とかも全部覚えないういけなくて。そういう小さなことも、大きなことのように感じて。毎日疲れちゃって、家に帰ると、まずすることは寝る! 4 時くらいに帰ると、もう布団に入って寝ちゃうの。頭が爆発しそうだから、とりあえず寝て、すごい長いこと寝ている感じだった。

発話番号 02, 2024-09-03-16'27-17'14

発話データ 2 からは、米国での学校規範に則した、適切な行動を採るための移動知を、C さんが形成している様相が観察できよう。米国での(再)適応の経験と記憶を語るという、回想的な視点においては、「小さなこと」のように感じられる米国の学校空間への適応行動も、再渡米直後の当時の C さんにとっては、「大きなこと」のように感じられ、情報過多に陥っている様子が発話データ 2 から受けとれる。その結果、「頭が爆発しそう」なほど、脳や身体への負担が生じ、自身でも驚くほど長時間の睡眠を当時は摂らざるをえなかった、と回顧されている。このような身体的反応をふまえ、C さんは、(再)適応 1 年半の情動的経験と記憶を、次のように総括する。

発話データ 3

1 年半ぐらひは、心のなかがジェットコースターみたいになって。[...] 心がね、もう大変だった。状態が。毎日学校に行っていると、いろんなことがあつて。数秒数秒、ドキドキしたりとか。今考えると、なんでもっとリラックスして(学校に)通えなかったんだらうとか、なんでこういうふうに振る舞っちゃってたんだらうとか、要領の悪さとか。[...] 今考えると(そういうふう

に) と思うけど、あれを全部経験したことによって、強くなったのは間違いない。なんか、表面的には、現地校通って、ESL を1年で卒業して、アメリカの大学に行きましたって言って、結構スラスラ行っている気がするけど、心のなかでは、理想と現実のギャップがあるのかわかんないけど、「なんでもっとできないんだろう」という焦りがたくさんあって、すごい大変だった。

発話番号 03, 2024-09-03-18'44-20'15

発話データ3からは、「ジェットコースターみたい」と表現されているように、学校空間において、常に「ドキドキ」する緊張状態が続くという、Cさんの過敏な情動の機微がうかがえる。では、このような「ジェットコースター」的情動の経験は、何が要因となって生じたものなのだろうか。次節では、RQ2に接続するこの主題に焦点をあてることで、より詳細にRQへの回答を検討していきたい。

4.2 情動の背景動因に関する社会言語学的措置：《自己検閲 (self-censorship)》

Cさんの自己評価によると、とりわけ、言語的適応・言語学習に関して、当時のCさんは「自意識過剰」だったという。ここに、発話データ3で「ジェットコースターみたい」と表現された、当時の経験と記憶の情動的側面を、より理解するための鍵があるように思われる。

発話データ4

私、変だと思うんだけど、自意識過剰なところがあって。なんだろう、誰も見てないのに私のこと。(みんなが) 見てると思ったりとか、誰も笑ってないのに、私の話している言葉も笑ったりしてないのに、自分の英語を下手だとか思ったりして。だから、その状態で現地校に通うと、本当にちょっとしたこと、「今日はプレゼンテーションがあって、C、ここに立って」とか、「はい、教科書を読んでください。次の人」って言って、ちょっと何行か、本当に数行読んだだけで疲れたりとか。本当に、細かい細かい一瞬一瞬を(当時は) 噛み締めて生きてたの。だから、たった5分の話でも、自分のなかに(記憶として) 残っちゃってて。何回も、「これは、こんなふうに行動しちゃったけど、よかったのかな」って、自分のなかでリピートしちゃったりとかして。学校の時間が、もし9時から4時までだとすると、その一瞬一瞬がすごいエピソード(量) になっちゃってたから、1日が長い。長いっていうか、1日のエピソードが、すごい、量が。今日はトイレに行ったとか、誰かと話したとか、全部エピソードとして残っちゃって。それがジェットコースターみたいな。こうなって、こうなって、こんなことがあって、みたいな。

発話番号 04, 2024-09-03-24'32-26'17

発話データ4には、発話データ3で示された「数秒数秒、ドキドキした」経験、つまり、「ジェットコースター」的情動の機微に応じて区分けされた、大量のエピソード記憶や意味記憶が脳に日々格納され、その結果、脳や身体に常時負担が生じているCさんの生活世界のありようが描出されている。では、学校空間における「自意識過剰」な状態は、なぜ生じたのだろうか。ここで、小林(2021)から示唆された、日常の相互行為における他者からの名付けや眼差し・評価が、Cさんの情動的側面にも影響している、という仮説のもと、RQ2への検討をさらに進めるため、言語規範や社会的な言語評価・価値づけの眼差しがもたらす象徴的暴力性(symbolic violence)について論じた、社会学者

Pierre Bourdieu (1930-2002) の議論を参照したい。

Bourdieu (1991) によると、言語市場のなかでも、とりわけ学校のように、統治権力の維持・補強の機能を担う公的機関においては、正統言語たる公用語・標準語を中心に、発話文脈に応じて言語レパートリーを適切に運用する能力（言語ハビトゥス；linguistic habitus）を習得・再生産することが、規範として要請されるという。このような言語規範のもと、当該言語市場に属する話者は、その言語規範・言語的価値基準を自らのうちに内面化し、自身の発話を日常的に「自己検閲（self-censorship）」することが指摘されている（Bourdieu, 1991, p.19）。「自己検閲」とは、内面化された言語規範に照らして、他者に自らの発話を肯定的に受容してもらうために、話者自らの発話のありかた（例：個別言語の選択、調音方法、スタイル・語の選択）を再帰的に点検し、文脈に応じて自己調節する営為を指す。このような自己検閲の営為には、元来、統治権力が恣意的に選択した正統言語の（運用能力の）獲得が、あたかも当然であるかのように話者が想定してしまうことで、しばしば自身の言語使用に対する気後れや自信の喪失によって、沈黙を強いられることもあることから、象徴的暴力としての「検閲（censorship）」という語調の強い術語が選択されている。

Bourdieu (1991) によるこれらの議論をふまえ、発話データ 4 をここで改めて検討してみたい。発話データ 4 では、「誰も見ていない」「誰も笑っていない」にもかかわらず、「自分の英語を下手だ」と感じてしまう、C さんの当時の心境が吐露されている。この発話からは、再渡米後の学校空間における、教師や同級生といった具体的な他者の眼差しはもとより、言語規範という、観念的で抽象的な他者ともいえる評価の眼差しを C さんが内面化し、それにもとづき、自己検閲を発動させているように思われる。このような自己検閲という再帰的営為は、自身の英語による発話のありようを、米国の学校空間という（相対的にはミクロな）言語市場における言語規範に準拠させ、適切かつ安定的に実践するための移動知を形成する試みとも理解できよう。このような自己検閲の営為に伴う「自意識過剰」な状態は、同時に、多様な情動（身体的反応）や感情（心的パターン）を多層的に喚起していることも、次の発話データ 5 から示唆されている。

発話データ 5

あの頃（16 歳の在米当時）は、（本当は）30 日だけなのに 1 年住んでるみたいな（時間が歪んだ）感覚。そうなっちゃった理由は、自意識過剰。もうなんか、自分の心と対話してるって感じ。一つ一つの一瞬のエピソードを後悔したり、一喜一憂したりとかする。「あの瞬間、もっと、これをやっておけばよかった」って思ったり。「あ、この時はできた」って思ったら、次でなんか失敗したりとか。いちいちそういうことを考えてたから、ジェットコースターって思ってたのかもしれない。[...] 脳が疲れてた。

発話番号 05, 2024-09-03-26'32-27'21

発話データ 5 からは、自己検閲による C さんの移動知の生成過程には、「後悔」や「一喜一憂」に紐づくかたちで、多様な情動（身体的反応）や感情（心的パターン）が喚起されている様相がうかがえる。このように当事者の経験と記憶に強く紐づく情動は、当事者自身が紡ぎだす「自己物語」における、「行為者性」（心の動きを語るという行為）や「視点性」（語り手の視点）、「評価性」（語りの評価を与える視座）という 3 観点を中心に、「移動する子ども」の経験と記憶を構成するうえで、大き

な役割を担うと考えられている（川上, 2023; 信原, 2017）。発話データ 3、4、5 で提示された、「ジェットコースター」のメタファーによる（再）適応経験の総括的描出は、C さんの当時の生活世界が、自己検閲に伴う情動を中核として形づくられたことを示唆する、ひとつの証左といえよう。

4.3 「移動する子ども」の経験と記憶の再帰性と情動：《想像の自己》

さらに C さんは、以下の発話データ 6 において、自己検閲が強く作用した背景動因を理解するうえで示唆的な語りを、提示している。

発話データ 6

（16 歳の再渡米当時）英語が話せないのに、アメリカで生まれて、なぜだか知らないけど、たくさん幼馴染もいるし… そういうのもあって、（自身の英語運用能力に対する）理想が高かったかもしれない。私だって、そこ（生まれてから 6 歳まで過ごした米国の都市）に残っていたら、今頃（英語が）ペラペラだったのにとか、（6 歳から 16 歳までの日本滞在時に）お母さんが英会話教室を調べて、（日本移住後の英語運用能力維持のための教育を）やってくれたらネイティブだったのに、とか、いろんなことを思った。そういう変な悔しさ（があった）。悔しいと思うこと自体、変かもしれないけど、そういうのがあって。だから大学もアメリカがいいってお父さんに言って…。

発話番号 06, 2024-09-03-21'10-21'55

発話データ 6 では、6 歳で日本に移住せずに米国にそのまま留まった自分や、日本に移住したのちも、英語運用能力を維持する努力を継続していた仮想的な自己を、C さんは具体的に思い描いている。そして、これらの仮想的な自己と、現実に出た自身の人生や英語とのかかわりを想像上で観念的に対比させることが、C さんの自己検閲のありように大きな影響を与えていたように思われる。このように、英語を正統言語とする言語規範のもと、米国という「想像の共同体」（Anderson, 1983）の十全的成員でありえた「想像の自己」を、リアリティを伴うかたちで仮想的に構築するに足る、経験と記憶を内的資源として持ち合わせている点に、往還に特徴づけられる C さんの生活世界・主観的意味世界の独自性がある、と解釈できるのではないだろうか。

第二言語学習の文脈における、これまでの研究をみると、学習者が将来の展望を構築する際、「想像の共同体」の一員としての自己を仮想的に投影することは、目標言語への学習者の「投資」のありように大きな影響を与えることが、広く指摘されている（Blackledge, 2003; Kanno & Norton, 2003; Norton, 2001）。これらの研究に比し、往還に特徴づけられる「移動する子ども」という経験と記憶とともに生きる当事者が、（再）適応の文脈で言語学習に取り組む場合、「その土地から移住することなく、そのまま留まっていた自分」「想像の共同体の十全的な成員であったかもしれない自分」を、強いリアリティをもって仮想的に構築できるぶん、このように豊かな内実をもつ《想像の自己》が、自己検閲の働きをより強力に促す可能性がある。この点に、自己検閲（4.2 節）と「想像の自己」（4.3 節）の接点を見出せるように思われる。

5. 結論

本稿では、幼少期から米日間の往還とともに成長した、Cさんのライフストーリーを手がかりに、往還という移動形態のもと、複数言語環境で成長する当事者の言語的適応・言語学習の過程には、どのような情動が喚起されるのか、その内実と背景動因について、探索的に検討を進めてきた。その結果、往還という移動形態の経験と記憶の独自性から、「その土地から移動することなく、仮にそのまま留まっていたならば、その共同体の十全的な成員であったかもしれない」という《想像の自己》を、リアリティとともに仮想的に思い描き、現実に出た自身の人生の軌跡と、想像のなかで比較する様相が明らかになった。また、このような《想像の自己》は、当事者の言語的適応に際して、目標言語の到達度に関する理想を過度に高く設定することにつながり、その結果、自身の発話に対する再帰的眼差し・自己調節的営為である《自己検閲》を、必要以上に強く促してしまう可能性が示唆された。そのひとつの帰結として、《ジェットコースターの日常と身体的反応》が、Cさんの米日間往還のライフストーリーにおける、中核的表現として提示されたと考えられる。

このように、本稿では、川上(2023)で理論的に提起され、これまでの先行研究では明示的に研究課題として十分に問われてこなかった、「情動」という身体的側面を、往還に特徴づけられる「移動する子ども」の経験と記憶を主題化する議論のなかに、予め研究課題として明示的に位置づけたうえで、Cさんのライフストーリーという具体的事例とともに、探索的な解釈・考察を進めてきた。この点に、先行研究と対置したときの、本研究の萌芽的論考としての意義や独自性・新規性が認められると、本稿は考える。

総じて、本稿で萌芽的に示された、往還に伴う言語的適応・言語学習によって喚起される情動的経験と記憶は、当事者が自身の「生／ライフ」の物語を統合的に構築するうえで、「快／不快」「肯定／否定」という二元論的評価をときに超越さえする、必要不可欠な中核的要素といえるだろう。この特徴が、情動を伴う適応経験の両義性にも影響を与えているように思われる。

今後、モビリティの拡充によって、往還という移動形態とともに複数言語環境で成長する、より多くの当事者が想定されるなか、かれらの言語的適応・言語学習に際する情動的側面に焦点をあてた視座・主題は、当事者の主観的意味世界により則した言語教育実践をおこなううえでも、重要な研究課題であると考えられる。今後、より多角的な視座から、多様な移動の経験と記憶に特徴づけられる、「移動する子ども」の主観的意味世界をさらに包摂したうえで、本研究課題に引き続き取り組んでいきたい。

引用文献

- 小倉康嗣(2013a)「生／ライフ」藤田結子・北村文編『現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践』(pp.172-181)新曜社
- 小倉康嗣(2013b)「ライフストーリー」藤田結子・北村文編『現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践』(pp.96-103)新曜社
- 小幡佳菜絵・小澤伊久美(2024)「移動する子ども」の名付けと名乗りの弁証法的営為—小林聡子(2021).『国際移動の教育言語人類学—トランスナショナルな在米「日本人」高校生のアイデンティティ』明石書店. [書評]『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』15, 80-91. <https://gsjal.jp/childforum/dat/jccb15-80.pdf>
- 川上郁雄(2013)「ことばとアイデンティティ—複数言語環境で成長する子どもたちの生を考える」宮崎幸江編『日

- 本に住む多文化の子どもと教育—ことばと文化のはざまで生きる』(pp.117-144) 上智大学出版
- 川上郁雄 (2021)『「移動する子ども」学』くろしお出版
- 川上郁雄 (2023)「情動の視点から見る「移動する子ども」学」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』14, 66-80. <https://gsjal.jp/childforum/dat/jccb14-66.pdf>
- 小林聡子 (2021)『国際移動の教育言語人類学—トランスナショナルな在米「日本人」高校生のアイデンティティ』明石出版
- 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (2008)『自伝的記憶の心理学』北大路書房
- ダマシオ・アントニオ (2003)『無意識の脳 自己意識の脳—身体と情動と感情の神秘』(田中三彦訳) 講談社
- ダマシオ・アントニオ (2005)『感じる脳—情動と感情の脳科学 よみがえるスピノザ』(田中三彦訳) ダイアモンド社
- ダマシオ・アントニオ (2010)『デカルトの誤り—情動、理性、人間の脳』(田中三彦訳) 筑摩書房
- 信原幸弘 (2017)『情動の哲学入門—価値・道徳・生きる意味』勁草書房
- ハヤシザキカズヒコ・山ノ内裕子・山本晃輔 (2013)「トランスマイグランドとしての日系ブラジル人—ブラジルに戻った人びとの教育戦略に着目して」志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛冶致・ハヤシザキカズヒコ編『「往還する人々」の教育戦略—グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』(pp.206-267) 明石出版
- 日高友郎 (2019)「オープンコーディング(open coding)」サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編『質的研究法マッピング—特徴をつかみ、活用するために』(pp.72-79) 新曜社
- ブルデュー・ピエール (1993)『話すということ—言語的交換のエコノミー』(稲賀繁美訳) 藤原書店
- Anderson, B. (1983). *Imagined communities: Reflections on the origin and spread of nationalism*. Verso.
- Basch, L., Schiller, N. G., & Blanc-Szanton, C. (1994). *Nations unbound: Transnational projects, postcolonial predicaments and deterritorialized nation-states*. Gordon & Breach.
- Blackledge, A. (2003). Imagining a monocultural community: Racialization of cultural practice in educational discourse. *Journal of Language, Identity & Education*, 2(4), 331-347. https://doi.org/10.1207/S15327701JLIE0204_7
- Bourdieu, P. (1991). *Language and symbolic power*. Polity Press.
- Corbin, J., & Strauss, A. (2015). *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory* (4th ed.). SAGE Publications.
- Kanno, Y., & Norton, B. (2003). Imagined communities and educational possibilities: Introduction. *Journal of Language, Identity & Education*, 2(4), 241-249. https://doi.org/10.1207/S15327701JLIE0204_1
- Norton, B. (2001). Non-participation, imagined communities, and the language classroom. In: M. Breen (Ed.), *Learner contributions to language learning: New directions in research* (pp.159-71). Pearson Education.